

日本初のアフリカ人大学長

在マリ日本国大使館

京都精華大学人文学部ウスビ・サコ教授（マリ共和国バマコ市出身）は、初めて日本の大学の学長となったアフリカ人です。サコ学長は、中国・北京語言大学及び南京東南大学への留学を経て、1991年に来日しました。京都大学で工学の修士号並びに博士号を取得。2001年より、京都精華大学教員として「空間人類学」をテーマに国や地域によって異なる環境やコミュニティと空間のリアルな関係を研究しています。2018年4月1日、同大学の学長に就任（任期4年）しました。

サコ学長は、「日本人と同じレベルで競争する」というルールを自らに課しながら、言葉もできなければ文化も知らない国で一から道を切り開いていきました。来日した当時は、外国からの留学生はそろって日本人学生と距離を置き、それを見た日本人も外国人学生を「他の人」という風に見ていました。これを打開するため、サコ学長は、学生時代、必死に勉強した日本語だけで会話をし、研究やレポートもすべて日本語で作成し、日本人との距離を縮めるよう努力しました。大学院で研究リーダーをしていた時は、日本人の目を外の世界へ広げるため、ベトナムなどアジアの途上国への研修旅行を企画し、また、自身の故郷マリにも連れて行きました。途上国での経験は、日本人学生に衝撃を与え、研究室の中では決して見ることで見ることのできないものを目にすることで、皆大事な何かを学んでいたといます。サコ学長はそれを、「国が先進国か後進国かといった問題ではなく、人間の真の姿に関することです。他の人間から学び、感じるようなことのできるようなことです。日本社会が忘れがちなことであり、思いきって日本の外に出て初めて学べることです。」といます。

いつの日からか、双方の視野を広げ、よそ者扱いを止める努力が功を奏し始め、日本で自分がもはや外国人として扱われていないことに気づきました。日本人が自分を日本人として扱ってくれていると感じるようになりました。そして、京都精華大学の教員になってからは、日本人とは日本語で流暢に交流できる良き同僚として、訪問した外国人とは効果的に対話できる仲介役として、同大学における一種の文化橋脚の人間版となりました。気がつくと、カリキュラム委員会など重要な各種委員会の委員にも任命されるようになりました。そして、2018年春、学長に就任しました。勤務年数も長い他の学長候補の日本人2名と、大学の将来に関するビジョンや自分のアイデアの実効性などを全校生徒の前で披露する日本語の討論会を経た上で勝利しました。サコ学長はこれに対し、「任意であった日本語での討論会を思い切ってやることで、自分は黒人やマリ人だから選ばれたわけではない、と自信を与えてくれる結果になりました。私が選ばれたのは、私が、他の候補者と同じレベルで挑戦することができたから

であり、また、私のアイデアのほうが優れていたからであり、私には大学に変化をもたらす可能性があったからだったのです。」と語っています。

京都精華大学 HP<http://www.kyoto-seika.ac.jp/about/greeting/>